

新指定文化財概要

種 別	有形文化財／絵画
名 称	石川文松筆 琴棋書画図襖絵
員 数	4 枚
時 代	江戸時代
所 在 地	XXXXXXXXXX
所 有 者	鈴木 源太郎
概 要	当作品は 4 枚の絵で構成されており、調査時には襖から外した状態で保管されていたが、襖絵として永い間日常生活の空間に晒されていたため、煤焼けと傷みの激しいことが惜しまれるが、往年の画面が偲ばれる大作である。琴棋書画とは中国においての士大夫、文人の嗜みとされた四芸を表したもので、古来漢画の画題として描き愛好された。作者の石川文松は、豪放なエピソードが多い半面、作品における人物や装飾等の書き込みが細かい。また、落款も強い書き方で、晩年に近くなると細かくて神経質な書き方であることから、比較的若い頃の作品ではないかと推察される。年号は明記されていないが、同家文書群の「万覚帳」（天保 13 年）に残る旧主屋の建築部材の購入控えなどから、旧主屋新築に合わせて新調されたものとも推測される。なお、歴史資料「鈴木家（鈴源）の所沢飛行場と近代を語る資料」及び有形民俗文化財「鈴木家（鈴源）の生業と社会生活を語る民具」とは密に関連しており、これらとあわせて同家が郷土絵師の襖絵を設けるほどの家格であったことを示すものでもある。 （1）揮毫図（162 c m × 88 c m） 波涛山水を描いた掛軸を背景に、机上に広げた料紙に書画の揮毫をする高士。側でそれを眺めている 3 人の高士と従者合わせて 5 人の人物を描いている。波涛山水画面の左上に、「文松画」の款記と文松刻字の朱文方印がある。 （2）書画図（170 c m × 87 c m） 従者の掲げる山水画の掛軸を觀賞する 2 人の高士と 3 本の巻軸を持つ 2 人の従者と合わせて 5 人の人物を描く。背景には大きな茶壺 2 個と台上に水注と煎茶器、それに水仙を活けた花器がある。主体を水墨で描いている。なお山水画面の右上に「文松」と読める朱文の瓢形（ひさごがた）印が押されている。 （3）棋図（171 c m × 88 c m） 囲碁を打つ 2 人の高士とそれを見守る 1 人の高士。後ろで器物を持つ 2 人の従者合わせて 5 人の人物を水墨で描いている。 （4）琴図（172.5 c m × 88 c m） 琴を奏でる高士、側でそれに聞き入る 2 人の高士。盆栽の飾ってある台の前で、煎茶を入れている従者、合わせて 4 人の人物を水墨で描いている。 指定理由 石川文松（1798～1857）は、郷土の絵師として周辺に多くの作品を残している。当作品は人物の表情の豊さ、頭髮、顎髭の描線の繊細な描写が、その人物を生き活きと表現している。衣装の描線は肥瘦のあるするどい細かい線描である。また書画図のなかの従者の掲げる画幅の山水画は、文松が文人画（南画）の技法にも長けていたことを示している。円熟した技量がかがえ、毛髪などの繊細な手法など、技巧的にも優れている。一般に知られていない作品であり、遺作品の少ない文松の作品に新たに加わるものである。作品の出来栄えと若い時期の作品という点が高く評価でき、所沢ゆかりの画家の技量の高い作品として貴重である。
担当委員	新井 政明（林 宏一）